

「家持歌日記の研究」概要書

松
田
聡

本研究は、家持歌日記としての性格を有する万葉集末四卷（卷十七〜卷二十）を主たる考察の対象とし、その組織の一端を明らかにすると共に、これら四卷が万葉集二十卷の中でいかなる意味を持っているのかということについて私見を述べたものである。

万葉集末四卷は、家持歌日記の性格を持ちながらも、同時に万葉集の掉尾を飾る歌巻として、全二十卷の一部を構成している。本研究としても当該四卷を独立した歌集のように捉えているわけではないが、これらの巻が家持歌日記の性格を持っているということは否定すべくもないだろう。しかし、末四卷がいかにして家持歌日記たりえているのかということになると、論者によってかなり認識に隔たりがあるということも事実である。末四卷を一樣に「歌日記」と捉えてよいかどうかということについてさえ、共通認識があるとは言いがたい。

しかし末四卷は、家持歌を軸に原則として日付順に配列するという点で一貫している。それならば、内容的にも何か一貫した方針に基づいて編まれているのではないかというのが本研究の問題意識である。思うに、原資料の様態を推測し、その資料間の相違を論うよりも、むしろ末四卷の中で一貫している要素の方により多く目を向けるべきではなからうか。増築を繰り返した家屋でも、最終的に増築を施した者の考えが建物全体に及ぶということは、十分にありうることだからである。そこで、本研究は、

1、末四卷はいかにして家持歌日記たりえているか。

2、家持歌日記の性格を持つ末四卷が万葉集に取り込まれて存在していることをどう考えるか。

という視点から、歌日記の問題を三部に分けて考察していく。第一部では歌日記の主題に関わる問題を、第二部では伝聞歌の問題を、第三部では題詞・左注の問題を、それぞれ中心に扱ったが、この分類も便宜的なものであり、その問題意識は全て右に述べたことにつながっている。

*

第一部では、家持歌の解釈を通して、末四卷に底流する主要なテーマのいくつかについて考察する。具体的には、ホトトギスと暦法の問題、交友・君臣和楽の問題、孤愁の問題などを取り上げ、これらの主題が末四卷の中でいかに表現されているかということ、それを展開させる形で末四卷を編んでいるものと見通されるが、その展開の相はあたか

も複数の主題の絡み合う変奏曲のごとくである。末四巻がかくあることによって、万葉集の中のいくつかの主題に光が当てられ、そこにある種の「和歌史」が構築されていることを見逃すことはできない。以下、各章の概要を記す。

第一章「大伴家持のホトトギス詠―万葉集末四巻と立夏―」では、家持が越中国守時代を中心に展開したホトトギス詠の意義について、主に暦法という方面から考察した。万葉集末四巻には「立夏」あるいは「四月一日」を以てホトトギスが鳴くという觀念が散見するが、このような発想は和歌史的に見て極めて異例なものである。特に「立夏」とホトトギスを関わらせるような歌は、巻十六以前に確認できないばかりか、平安中期頃までを視野に入れても類例を見出しがたい。末四巻のホトトギス詠は、それ以前の巻に潜在する暦法意識に光を当て、それを展開させる形で詠まれたものであり、末四巻がいかにも編まれているかを端的に示すものである。

第二章「家持と書持の贈答―『橘の玉貫く月』をめぐって―」では、巻十七冒頭歌群の一角を構成する家持と書持の贈答歌群を取り上げ、家持歌の解釈について新見を提示すると共に、このような歌が巻十七のこの位置に載録されていることの意義について考察した。家持と書持のこの贈答に底流する「四月のホトトギス」という主題は、万葉集全体の中では異例なものに属するが、歌日記におけるその後のホトトギス詠には繰り返し現れる。この主題が巻八や巻十に胚胎する要素を展開させたものであるということに注意したい。当該歌群は、単に歌日記最初のホトトギス詠であるというだけでなく、主題上の展開という点から見ても、歌日記におけるホトトギス詠の導入たりえていると言ふべきだろう。

第三章「万葉集の饞宴の歌―家持送別の宴を中心として―」では、万葉集の饞宴の歌を取り上げ、饞宴において季節の風物を共有し交友の情を尽くすという発想が末四巻に偏って現れることを指摘した。この発想はそれ以前の巻においては大伴旅人関係の歌群にしか確認できないものであるが、家持は末四巻における饞宴の歌をその旅人の世界に連なるものとして位置づけているのであろう。その背景には、友と美景を共有することを志向する漢風の交友観があると考えられる。

第四章「大伴家持の宮廷讃歌―長歌体讃歌の意義―」では、長歌体を取る家持の宮廷讃歌について考察した。家持の宮廷讃歌四篇は全て末四巻に載録されるが、越中を離れてから家持の詠んだ長歌七篇のうち三篇までが宮廷讃歌であるということ、そして帰京

前後の長歌が宮廷讃歌に限られるということに注意したい。これらの讃歌の制作は、歌を媒介とした君臣の交流が宴において実現することを理想とする家持の和歌観に支えられており、讃歌の制作が帰京前後に集中するのは、帰京にあたってそうした宴を現実の中に求めようとする家持の意識を物語るものと考えられる。

第五章「大伴家持の春愁歌」では、春愁歌と通称される巻十九巻末の三首について、これらがいずれも交友への志向を基層に持つものであり、その点において和歌史的な枠組みから大きく外れるものではないこと、しかし、二十三日作歌から二十五日作歌へと詠み継がれる過程において、友の不在ということから誘発されるもつと本質的な孤独感へと悲愁が昇華されていったことなどを論じた。また、「鶯」「竹」などの歌語や、巻十九巻末歌に見られる歌論意識が、巻五から末四巻へと展開してきたものであることにも言及した。

第六章「大伴家持の陳私拙懐一首―万葉讃歌の終焉―」では、家持の最後の宮廷讃歌について考察した。当該歌は防人検校の折に難波で詠まれたものであるが、あたかも天皇が難波宮に行幸しているかのように表現されている。しかるに、当時は皇太后宮宮子の諒闇中で、行幸などあるはずがない。長歌の表現には天平十六年の聖武行幸の面影が顕著であることから、家持が当時のことを追懐しつつ、その記憶を核に今現在の行幸を「幻想」したものであることが知られる。当該歌が離宮讃歌の様式に拠っているのは、天平十六年の行幸を追慕し、行幸従駕の場を仮想しているからにほかならないが、そこには家持の君臣和楽の場に対する憧憬の念がうかがわれる。

補論「家持亡妾悲傷歌の構想」では、巻三に載録される家持の亡妻挽歌を取り上げた。当該歌群は、いわゆる家持歌日記に直接関わるものではないが、題詞と歌の総体で一つの作品世界を作っているという点において、また、季節の推移に従って歌が配列されているという点において、歌日記的な手法の先駆をなすものと認められる。この論の趣意は当該歌群の解釈に新見を提示しようとするところにあるが、暦法と季節の風物の関係を論ずることによって家持歌日記の問題を考えるための一助とした。

*

第二部では、いわゆる「伝聞歌」の問題について考察した。万葉集末四巻が家持歌を軸として編まれていることは誰の目にも明らかであるが、その一方で、この四巻に家持以外の作者の歌が少なからず採録されているということもまた事実である。これらの中

には家持の同席する宴で披露された歌や、家持との贈答歌なども含まれているが、採録の事情が全く不明であるために、家持との関係が一見明らかでない作も見受けられる。とりわけ巻十九の後半から巻二十にかけてはその傾向が強い。本研究ではこれらを便宜的に「伝聞歌」と総称しているが、家持歌日記の性格を有する末四巻に、このような他人の作が採録されていることをどう捉えるべきだろうか。

仮に自他の作を無作為に蒐集し、それを日付順に並べただけのものであるならば、そうした歌巻を「家持歌日記」などと呼んだところでそれほど意味のあることとは言えない。そもそも伝聞歌を多量に抱え込む巻二十などは「歌日記」と呼べなくなってしまうおそれすらあるのではないか。問題は「伝聞歌」が家持の「生」にどう関わっているのかということであろう。無論、個々の「伝聞歌」に即して見ればその採録の事情は様々であり、従ってそれらの歌と家持との関係性も一様ではないと考えられるが、全体として見れば「伝聞歌」はやはり家持に関わるものとして「歌日記」に取り込まれているのではなからうか。末四巻の各巻に散在する「伝聞歌」を総体として捉えたときに、その採録にあたって何らかの基準があったのかということは、一度考えてみるべき問題だと思われる。以下、各章の概要を記す。

第一章「万葉集末四巻の伝聞歌―家持歌日記の方法―」では、末四巻における「伝聞歌」の問題を総括的に論じた。第二部の根幹をなす論である。末四巻は家持歌日記の様相を呈しながら、一見家持とは無関係とも思われる他人の歌―便宜的に「伝聞歌」と総称する―が多数採録されているが、本章はその「伝聞歌」の全てについて検討し、末四巻の編纂手法について考察したものである。本章の分析によれば、末四巻は、家持に直接関わる歌だけでなく、伝聞歌を配することによって、家持の興味・関心がどこにあったかを示そうとしていると考えられる。

第二章「大宰の時の梅花に追和する新しき歌―万葉集の梅柳―」では、巻十七冒頭歌群に含まれる伝聞歌の中から大伴書持の歌を取り上げ、その解釈に新見を提示すると共に、このような作がこの位置に配列されることの意味について考察した。梅と柳を取り合わせて詠んだ万葉歌はほぼ奈良朝官人の宴歌に限られ、その多くが梅花の宴に関わる作である。本章では漢籍との比較を通し、「梅柳」の受容が「漢籍↓長屋王の詩宴↓梅花の宴↓当該歌群」という流れの中で捉えうることを論じた。

第三章「射水郡の駅館の屋の柱に題著せる歌―題壁と駅―」では、伝聞歌の一つであ

る四〇六五番歌を比較文学的に考究し、これが「題壁詩」や「駅の詩文」といった漢籍への興味から採録されていることを明らかにすると共に、歌日記において当該歌が家持自身の関心の所在を示す役割を担っているということを論じた。

第四章「大伴家持の防人関係長歌―行路死人歌の系譜―」では、家持が防人歌の蒐集に関わって詠んだ三篇の長反歌について、これらが行路死人歌の発想に拠っていることを明らかにし、歌日記の中でいかなる意義を持つているかということについて考察した。官命のままに家族と離れて旅行く防人たちに、家持はかつての自分の姿を投影しつつ作歌しているのであるが、歌日記はそのことを積極的に語ろうとしていると見るべきである。集中随一の伝聞歌群と見なされる勝宝七歳防人歌を、家持の視点から歌日記の中に位置づけているのが防人関係長歌なのである。

補論一「防人関係長歌の構想」では、第四章で取り上げた三篇の長反歌について、その表現方法の違いについて論じた。三篇の長反歌は一見すると同じ趣向ではあるが、表現の重点が微妙に異なり、三者三様の世界を構築している。これは表現方法をめぐる家持の様々な試みの過程に対応しているといつてよい。これらの防人関係長歌が防人歌と混在する形で載録されているのは、一つには、そうした家持の試みが防人歌と響き合う形でなされていたことを示そうとしているからであろう。

補論二「防人歌の蒐集と家持」は、第四章や補論一の補助的考察として、天平勝宝七歳防人歌は家持の個人的関心によって蒐集されたものと見るべきことを論じた。少なくとも現存する文献による限り、勝宝七歳以前にかくも大規模な蒐集が行われていたという痕跡は見出しがたい。この論では、家持が事前に各国庁に蒐集の命を下すことはできないとする説に対して、その説の成り立たないことを論証し、一案として朝集使の利用ということを提示した。伝聞歌蒐集の一端について歴史的側面から考察したものである。

*

第三部では、末四巻における題詞左注の問題を集中的に取り上げた。万葉集末四巻には、歌と題詞左注とが一体となつて一つの作品世界を作っているというケースが往々にして見受けられる。また、題詞左注の中には比較的長文のものもあり、序や書簡を伴うものさえある。総じて、末四巻の題詞左注は散文としての性格を濃厚に有していると言つてよい。但し、題詞左注の散文化的な性格は、その長短と本質的には無関係と見るべきであり、たとえ短いものであつても、家持の生きざまや心情に関わるものであれば、やはり散文化的な表

現としてその意義が追究されるべきであろう。それらは歌日記の中では家持を語る「地の文」としての性格を持っていると見なされるからである。もちろん、これらの題詞左注の中には、原資料の段階から付されていたものもあつたかもしれないが、万葉集に取り込まれている以上、これらの題詞左注は最終的に編者によって統括されていると見るべきではなかるうか。家持自身が編者の立場から題詞左注を付すことにより、自らの軌跡をより効果的に語ろうとしていると考えるのである。以下、各章の概要を記す。

第一章「万葉集末四巻における作者無記の歌―歌日記の編纂と家持―」では、末四巻に一貫する作者記載のありようについて論じた。末四巻には作者または伝誦者を明示しようとする態度が徹底して貫かれている。この中であつて作者注記を完全に欠く歌が三例認められるが、それが家持の「個」に収斂するような作品に限られることに注意したい。家持自身が、作歌・筆録・編纂の全てに関わりつつ、自作の歌を配列することによつて、自らの歩みや個人的な思いを語ろうとする、その日記的な営みが、作者注記の欠落という現象の背後に見て取れるのである。

第二章「依興―家持歌日記の問題として―」では、家持研究における重要課題と目される「依興」の問題について考察した。家持歌に偏つて現れる「依興」という記載は、編者が作歌事情を明瞭に示し得ないと認識した歌に付した編纂上の注記である。依興歌に特殊な歌が多いのはあくまで結果であり、家持が予め「興の歌」なるものを作ろうとして詠んだものではない。依興と記すことは、いつ感興に襲われたかということに目を向け、その心の動きを時系列の上に位置づけようとする営為であり、そこには日記文学にも比すべき自照性を見て取ることができる。

第三章「述懐―天平十九年のホトトギス詠―」では、万葉集の述懐歌全般について比較文学的に検証し、「述懐」の語の意味を明らかにした上で、天平十九年の述懐歌（17・三九八八）が歌日記の中にどう位置づけられているかを考察した。万葉集における述懐歌は、他の官人の存在を強く意識しつつ、その時相手と共有すべき思いを詠んでいるという点で共通している。天平十九年の述懐歌も同様で、前後の歌との関わりにおいてその「懐ひ」が浮かび上がってくるように配列されているのであるが、これは最後の四巻が日記文学的に編纂されていることの一つの証左と言つてよい。

第四章「拙懐―帰京後の家持―」では、「拙懐」について論じた。万葉集には題詞又は左注に「拙懐」という異例な記載を持つ歌が三例あるが、これらが全て帰京後の歌日記にお

ける家持歌であることは偶然ではない。これらはいずれも、過去への追懐の念を核として、ありもしない現在の宮廷行事を幻想するものであり、明らかに共通点を持っているからである。つまり、ありもしない宮廷行事を幻想したことに対する憚りの念と、私的な追懐に基づくという自覚が、家持をして「拙懐」と記載せしめたと考えるのである。

第五章「未奏―帰京後の宴―」では、「未奏」「不奏」などと記される歌を取り上げ、その背景を検証すると共に、こうした歌が帰京後の家持歌に偏って現れることの意味について考察した。これらは第一義的には家持の奏上に対する思いの強さを物語るものとして読むべきものであるが、その一方で、この注記の背後に家持の葛藤が垣間見えるということもまた否定できない。実際には奏上の機会がなかったにもかかわらず「未奏」「不奏」と記し続けること自体、思うに任せぬ現実を暗に物語るものだからである。卷十九卷末の春愁歌に至る道程を見据えたとき、天平勝宝四年十一月八日の日付を持つ最初の未奏歌は、歌日記における一つの転換点を示すものと考えられる。

*

かくして、末四巻はその内部に種々の断層を持ちながらも、全体としては家持歌日記として構想されていると認められる。仮に増補を繰り返してきたものだとしても、最終的な形態としては一貫した方針の下に編まれていると見てよいだろう。しかも、末四巻はその内部で完結しているわけではなく、先行する巻の達成を受けて、そこから選び取ったいくつかの要素を展開させる形で編まれている。それらの要素は家持の和歌観によって選択されたものと考えられるが、それはそれまでの和歌史――万葉集の中に描き出されたものとしての――に対する家持なりの「解釈」と言っても過言ではない。先行する巻の中に描き出された歌の世界を、家持が解釈し、展開させているということである。こうした内容を持つ四巻が万葉集の末尾に据えられることによって、万葉集に撰集としての方向性が付与されていることを見逃すべきではあるまい。要するに末四巻は万葉集の末尾にあるべき歌巻として編まれているということである。

ちなみに、本研究は末四巻の編者が家持自身であるという仮定の上に立って論述を進めてきたが、考察の範囲ではその仮定と矛盾する事実は認められない。万葉集の中に描かれた歌の歴史は、家持という一官人に収斂する形で示されているわけだが、それは家持自身によって仕組まれたものと見なければならぬだろう。家持は万葉集における「和歌史」を自らの生に関わる形で示そうとしているのである。その背後に歌の道を継承する者としての家持の矜持があることは言うまでもあるまい。